

「現代アートを軸とした地域の有形・無形の知財の発掘・活用」

プロジェクト参加教員

太田純貴（人文学科多元地域文化コース 准教授）

菅野康太（人文学科心理学コース 准教授）

酒井佑輔（法系社会学科地域社会コース 准教授）

農中至（法系社会学科地域社会コース 准教授）

清水香（教育学部美術教育/人文社会科学研究科人間環境文化論専攻 准教授）

役割分担：太田（代表）＝企画・司会・コメンテーター・資料収集・調査・研究の総括

菅野・酒井・農中・清水＝企画・アドバイザー・コメンテーター

助成額

373,560 円

プロジェクトの目的

国内外を問わず、そしてさまざまな文脈において、アートやそれに関連する知見が取り入れられるようになっている。地域の活性化にアートを活用するという発想は、その一例として捉えることができるだろう。このとき、しばしば注目されるのが「現代アート」というジャンルである。鹿児島には現代アートを扱う美術館である「霧島アートの森」はあるものの、鹿児島では現代アートというジャンルは浸透しているとは言い難いように思われる。だが、こうしたことは、鹿児島において現代アートやそれに関わってきた人々や、現代アートを考えようとした出来事が、霧島アートの森以外には不在であり続けたということ、決して意味はしない。

以上を踏まえて、本プロジェクトの主目的として以下の二点を設定した。

1. 流行的に扱われる側面もある現代アートを、鹿児島という地域に根ざしながら堅実に向き合ってきた関係者の活動を掘り起こす。
2. 鹿児島における現代アート関係の活動の射程や可能性を検証する。そのために、近隣県の状況との比較を行う。比較のための対象として、国内において現代アートを専門的に扱う熊本市立現代美術館の事例や取り組みを取り上げる。

具体的なプロジェクトの内容

上記の目的 1 と 2 は、相互に結びついていることは明らかであるが、便宜上、以下では 1 と 2 に分けてそれぞれの内容と成果について記述する。

〈1 について〉

2022 年 10 月 21 日（金）の 14 時半から「生きる私が表すことは。」総括ワークショップを鹿児島大学で行った。このワークショップは、2021 年 10 月 16 日（土）から 10 月 24（日）にかけて、鹿児島市内の長島美術館で開催された展覧会タイトル「生きる私が表すことは。」に基づいている。「生きる私が表すことは。」展は、鹿児島にゆかりのある女性作家 6 名によるグループ展であった。本ワークショップでは、展覧会出展作家である、さめしまことえ氏（美術作家）、平川渚氏（美術作家）、木浦奈津子氏（画家）と展覧会のキュレーションを行なった原田真紀氏（インディペンデント・キュレーター）の四氏をお呼びして、個々の作品の成立過程や背景、展覧会全体の意図、鹿児島で現代アートの展覧会を行うことなどについてお話を伺い、参加者と議論を行った。

〈2 について〉

2022 年 12 月 9 日の 14 時半から「現代アートと地域とまちづくり」と題したワークショップを、鹿児島大学で行なった。登壇者は、熊本市立現代美術館の主任学芸員である佐々木玄太郎氏、東京、山口、鹿児島でアーティストや企画展、イベントの広報やマネジメントを行う四元朝子氏（サンカイ・プロダクション LLC 広報／アートコーディネーター）、中心市街地活性化・公共空間利活用・子育て支援・男女共同参画など社会課題の解決に向けた取り組みをサポートする事業を行う市村良平氏（株式会社スタジオグッドフラット 企画・プロデューサー）の三氏である。本ワークショップでは、佐々木氏、四元氏、市村氏の三氏それぞれの立場から地域やまち（づくり）とアートとの関わりについてお話しいただいたのち、会場を交えたディスカッションを行なった。

プロジェクトの成果

〈1 より得た成果〉

- ・ 地域における無形の文化的知財の活性化、および芸術文化活動や成果の記録・アーカイヴ化
- ・ 地域で活躍するキュレーターとアーティストを中心とした人的ネットワークの構築
- ・ ジェンダーの問題を考える契機の提供
- ・ 方法論としてのアートの可能性・限界と教育の関わりを考える契機の提供

特に「地域における無形の文化的知財の活性化、および芸術文化活動や成果の記録・アーカイヴ化」については「生きる私が表すことは。」関係者が制作した展覧会カタログについての情報を得て当該カタログを入手することで、鹿児島におけるアートや関連する活動のアーカイブ化の端緒を得ることができた。本ワークショップおよびそれにより構築できた人的ネットワークは、地域とアートの関わり方、ジェンダーの問題を検討する契機となると同時に、地域が保有する知的・文化的資源の活用を意味し、それを踏まえた鹿児島の現代史研究の活性化につながると考えられる。

〈2 より得た成果〉

鹿児島と熊本の事例を通して、アートとまちづくりと地域の関係についての具体的かつ実証的な知見を得ることができた。こうした知見を通して、アートとまちづくりに関して鹿児島の事例の独自性・重要性の発掘する端緒を得ることができ、かつ、実践的な営みについても情報を得ることができた。本ワークショップは、卒業後は地域でアートや文化的事業に従事していきたい学生にとって、具体的なビジョンや方向性を与える契機となった。また、一般の参加者もおられ、大学と地域の交流の場ともなったと思われる。

1と2のワークショップを企画し実行した派生効果として、郷土の作家を発掘し大きな枠組みに位置付けるといふ地道かつ重要な研究活動を行なっている学芸員の方々や、アートと（地域の）教育活動に従事されてこられた学芸員の方との人的ネットワークを構築することもできた。これらの人的ネットワークを構築できたことで、アートに関連した地域の有形・無形の知財を今後掘り起こしていくためのさらなる筋道をつけることができた。

プロジェクトの成果物

太田純貴ゼミの学生によるイベントフライヤー。



「生きる私が表すことは。」

「現代アートと地域とまちづくり」